

SHOW HEYシネマルーム

★★★

鉄西区

(Tie Xi Qu / West of Tracks)

2003年・中国映画・545分

配給/シネマトリックス

2004 (平成16) 年7月10~11日オールナイト鑑賞 (PM10:40~AM8:40)
＜シネ・ヌーヴォ・中国映画の全貌2004＞

Data

監督・撮影・編集: 王兵 (ワン・ピン)

👁️👁️ みどころ

中国東北部にある遼寧省の都市瀋陽は、新中国建国後、労働者のまちとして栄えた。鉄西区は、その瀋陽の工業地帯の中心部にあり、1980年代はじめには、100万人の労働者が働いていた栄光のまち。しかし、重厚長大型の国営企業は斜陽化し、次第に瀋陽のまちは、衰退していった。この『鉄西区』3部作は、この労働者のまち瀋陽における、鉄西区の衰退の様子を、王兵監督がドキュメントで描く作品。『第1部：工場』では、経営に苦しむ鉄西区の3つの工場が没落していく様子を記録する。『第2部：街』は、鉄西区の労働者住宅に住む一群の若者たちを追う。『第3部：鉄路』は、鉄西区の工場を結ぶ古い貨物鉄道の衰退を検証する。この3部構成、全9時間5分というドキュメントの長編を、オールナイトで観るのは極めてしんどいものだが、鑑賞後の充実感はタップリ、そして考えさせられる課題もいっぱい。もっともっと勉強しなければと痛感した次第・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<瀋陽と私>

中国東北部の遼寧省にある都市瀋陽（しんよう）は、日露戦争の時代に奉天大会戦が行われた土地として有名。この奉天大会戦は司馬遼太郎の『坂の上の雲』の中で詳しく描かれている。また瀋陽は、日中戦争の端緒となった1931年9月18日の柳条湖事件勃発の地であり、現在瀋陽には巨大な「9・18事変陳列館」が建てられ、その内部には日中戦争の生々しい資料がたくさん展示されている。私がこの瀋陽を訪れたのは、2000年8月10～14日の大連・旅順・瀋陽旅行の一貫だったが、近代的で美しい大都会、大連と対比しながら瀋陽のまちを見学できたことは大きな収穫だった。なお、私が瀋陽を訪れ

た翌年の2001年9月18日には、この「9・18事変陳列館」において、日中戦争開始70周年を記念する大規模な反日大集会が開催されたことが報道された。

<重工業と労働者のまち瀋陽>

パンフレットによると、瀋陽は労働者のまち。そして、鉄西区はその瀋陽の工業地帯の中心にあり、1980年代はじめには100万人の労働者が働いていた栄光のまちとのこと。しかし、1979年の鄧小平による改革開放政策への「切りかえ」によって、上海、広東、大連などのまちにおける輸出型の新興産業の進展とは対照的に、瀋陽の重厚長大型の大工場群は不況に陥り、今や瀋陽市のある遼寧省は、250万人の失業労働者を抱えているといわれている。そして、「東北病」という新語を生むほどになっている。この映画が描く鉄西区は、その斜陽の象徴と化してしまった瀋陽のまちだ。

<この映画の目的は？>

この映画の目的は、この瀋陽にある鉄西区の斜陽の状況を、客観的かつ克明に描くこと。その結果、この映画は9時間5分という超ロングのドキュメント作品となった。ドキュメント映画であるため、監督の主張やテーマを明確に設定した人為的なストーリー構成は存在しないものの、そこには、やはり当然、監督によるドキュメント作成の視点が存在する。

そして、それはいうまでもなく、巨大な国営産業の衰退という流れの中で、翻弄される労働者たちの生の姿を描くこと。王兵監督はこれを、第1部：工場、第2部：街、第3部：鉄路という3部構成で、丁寧に描いていく。

<第1部：工場（240分）>

第1部は、途中休憩があるものの、240分（4時間）という長丁場。最初に登場するのは、1934年に日本が建てた巨大な煙突を含む三本煙突で知られる瀋陽精錬工場。これはパンフレットによれば、「鉄西区のシンボルとなっていた工場で、広大な工場群とその歯車として組み込まれた労働者、その巨大なシステムは、かつて中国で輝いていた理想を体現するものであった」とのこと。

しかし、今やその工場内は鉛中毒の危険が蔓延し、事故の危険におびえながら、工場の最終閉鎖を待つばかりの状況となっていた。これに続いて描かれる工場は、瀋陽ケーブル工場と瀋陽圧延工場の2つ。これらの工場でも、仕事が減り、労働者が解雇され、給料は遅配状態。また、それぞれの工場に発生するさまざまな問題。王兵監督のカメラは、これを丹念に追っていく……。

<第2部：街（175分）>

第2部は、鉄西区の労働者住宅に住む一群の若者たちが主役。大人たちが工場閉鎖やレ

イオフで苦しむ一方、第2部に登場する17～18歳の若者たちは、さまざまな恋愛模様を展開。

第2部の大きなテーマは、再開発。つまり、一帯の古い労働者住宅を取り壊して、新しく共同住宅を建てるわけだが、日本の都市再開発法に基づく市街地再開発事業のように、整備された法制度に基づくものではなく、極めて大雑把かつ権力的なまちの再開発だ。したがって、期限を定め、それまでに住宅を取り壊すという当局の一方的な発表にとまどいつつ、結局はこれに従わざるをえない労働者たち。瀋陽の鉄西区における労働者住宅をめぐる再開発の様子は、都市問題を勉強している私にとって、非常にショッキングな映像……。

<第3部：鉄路（130分）>

第3部は、鉄西区の工場を結ぶ古い貨物鉄道の衰退を検証するもの。鉄道労働者たちは、仕事が減り、今は将棋などの暇つぶしに明け暮れる毎日。また、鉄西区には「鉄道扶養族」として、原材料のクズ拾いによって生計を立てている人たちもいる。しかし、鉄道管理局が、その手入れを命じたため、そこにはさまざまな事件が発生。さあ、その展開は……？

<9時間5分のオールナイトの観客たちは？>

2004年7月10日（土）午後10時40分～7月11日（日）午前8時30分まで、休憩を含んで10時間にわたってオールナイト上映されたシネ・ヌーヴォ内の観客席は満席で、両脇には補助イスも。問題意識をもった映画ファンが、これだけたくさんいるということにびっくりするとともに、少し心強くなったものだ。

もっとも私自身は、7月10日（土）には、午後1時20分から観た『宋家の三姉妹』（97年）、『阿片戦争』（97年）、『宋家の悲劇』（94年）に続くオールナイトだった上、7月11日（日）には、午前中仮眠した後、午後0時5分から『項羽と劉邦』（94年）、『三国志<第1巻>』（96年）、『三国志<第2巻>』（96年）、『三国志<第3巻>』（96年）を観なければならないという超ハードな日程。

そのため、この『鉄西区』上映中は、適当に居眠りしながら、要所では目を覚ましてストーリーを理解するという、変幻自在の映画鑑賞の達人ぶり（？）を発揮。しかし、とにかく疲れた。「ああ、しんど！」のひとことだが、同時に充実感も……。



「鉄西区」(第1部 工場)
写真協力：山形国際ドキュメンタリー映画祭

